様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 4 月 7 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19320046
研究課題名（和文）　旅行記と文学創造-フランス文学の場合

研究課題名（英文）　Writing journey. How does a journey record become a literary work?
－In the case of French literature

研究代表者
中地　義和（NAKAJI YOSHIKAZU）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50188942

研究成果の概要（和文）：

旅と文学は古来密接な関係を結んできたが、西欧では大航海時代以後、世俗的または宗教的権威の意向を受けて大旅行を企てた探検家や宣教師によって、多数の旅行記が遺された。フランス革命を経て近代に入ると、「記録する旅行者」に代わり、「旅する作家」が登場する。本研究は、この大きな変化以後を主な対象として、旅とフランス文学との関係を、時代の条件との多様な関わりを勘案しながら時系列に即してたどり、最後に、旅は今日なお文学的霊感の源泉となりうるかという問いに肯定的に答える形で締めくくられた。

研究成果の概要（英文）：

From ancient times, there has been a close connection between journey and literature. In Western Europe, since the Age of Discovery, many explorers and missionaries have left records of great navigations led under the order of secular or religious authorities. In Modern Ages since the French Revolution, “travelling writers” take the place of the “writing travellers”. Based on the discussion of various relations of journey and literature, and focusing on the specific conditions of each modern period, our research has been able to answer positively the question whether the journey remains today as it was one of the effective sources of literary inspiration.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 4,700,000 | 1,410,000 | 6,110,000 |
| 2008 年度 | 5,400,000 | 1,620,000 | 7,020,000 |
| 2009 年度 | 4,200,000 | 1,260,000 | 5,460,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 14,300,000 | 4,290,000 | 18,590,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：(1) 近代旅行記 (2) エキゾチズム (3) オリエンタリズム (4) アイデンティティ (5) ユートピア (6) 文化相対主義 (7) ポストコロニアル (8) グローバリゼーション

１．研究開始当初の背景
研究代表者は 19 世紀の詩人ランボーや現代作家ル・クレジオを主たる研究対象とし、彼らの文学にとって旅が重要との認識はかねてより持っていた。数年前に、17 世紀フランスの新教徒で迫害を逃れ、新天地を求めて世界の海をさまよいながら辛酸を舐めつづけたフランソワ・ルガの『フランス島への旅』を訳す機会を得、近代と前近代の旅行記の存在理由と書かれ方とが本質的に異なるという直観をもった。また報告と虚構との境界がしばしば曖昧で、旅行記というジャンルはフィクションを助長する場になることが多いことを痛感した。そこで近代における旅と文学創造の関係を、前近代の旅行記との対比において考察することは、新たな視点からの文学史構築の可能性を拓きうると考えた。

２．研究の目的
旧体制下では人文学的な知識・教養の総体を指していた「文学」(littérature)が、ほぼ革命期を境に、言語芸術、つまり言語による美的なものの創造と受容、という近代的意味に特化され、それに呼応して、「文学」の生産主体としての「作家」という、もう一つの近代的な概念と範疇が生まれる。それと同種のずれが、近世以前の航海家たちの旅行記と、近現代の「作家」による旅行記の間にも認められる。「記録する旅行者」(voyageur-écrivain) が「旅する作家」(écrivain-voyageur) に変貌するからである。本研究は、「文学」と特権的関係をもたない航海家が著した旅行記や航海日誌ではなく、ひとまず「文学」という制度に組み入れられた旅行記を対象とする。具体的には、(1) ロマン主義時代から 19 世紀半ばまで盛んに書かれる「東方紀行」（シャトーブリアン、ラマルティーヌ、ネルヴァル、ゴーティエ、フロマンタン）、(2) 20 世紀初頭の異郷感の探求（ロティ、セガレン、サン・ジョン・ペルス）から自己投企（ミショー、レリス、ジッド）にいたる流れ、(3) 第二次大戦後のある種の作家（ル・クレジオ、ブーヴィエ）に見られる旅行記の新たな可能性、旅行記とフィクショナルな作品との多様な関係、の三つの主要テーマを立て、作家や時代に固有の動因と、旅行記に底流する普遍的動因（たとえばユートピア性）を検証する。そのうえで、外的現実と作家の実存とに根ざす旅行記が、芸術表象の範疇に組み込みきれない本質をはらみ、「文学」の産出を促すと同時にその閉鎖性を破る作用を及ぼしつづけるジャンルであることを個別作家、作品の具体的分析を通じて明らかにすることをめざす。また、現代において、旅行記はなお文学たりえるかという問いに答えることを試みる。

３．研究の方法
以下のような着眼点を具体例とともに検討した。

(1) 旅の目的地と動機づけ。「東方（オリエント）」とはどこを指すか。

(2) 旅行記の形式と筆致。印象を断片的に書きとめたものか、息の長い叙述になっているか。旅の途上で書き綴った旅日誌または書簡の形式か、帰還後に時間的心理的距離をおいて練り上げたことを明示するものか。

(3) 旅行記における描写。既存の書物の描写を借用する場合が少なくない。その借用は秘密裡に行なわれているか、公然と行なわれているか。

(4)「他者」「他文化」はどのように描かれているか。多くの場合、自文化との比較が見られる。他なるものを劣ったものとみなし結局自文化中心主義に帰着するのか、あるいは他なるものは他性によって価値を持ちつづけるのか。

(5) 旅行記は何のために、誰のために書かれるか。誰が読むか。

(6) 大航海時代の探検家とは違い、19 世紀の作家には大規模な移動、広大な空間を踏破する手段も必然性もない。「東方」まで赴く必要すらない。デュマのスイス旅行、スタンダールのイタリア旅行、スタール夫人のドイツ旅行のような隣国への旅行、あるいはフランス国内の旅行も、旅行記を著す立派な動機になる。ロマン派の作家たちが残したこうした近場の旅の記録について、それが当の作家にとってもつ意味を考える。

(7)「東方紀行」の語る土地がもはや未知の土地ではなく、旅行記は真に新たな情報を読者に提供しえないという状況は、じつは 19 世紀初頭から生まれつつあった。いきおい、旅行記の価値は、「何を語るか」から「いかに眺め、いかに語るか」に、百科全書的知識から個性的な視線と筆力の問題へと移る。旅行記は 19 世紀を通じて、ますます文学的表象のなかに取り込まれていく。19 世紀半ば以後 20 世紀前半までの旅行記の変遷を追い、外界の表象ではなく自己の主観性の表現として、旅行記がどのような形で 20 世紀に蘇生しえたかを跡づける。19 世紀半ば以後 20 世紀前半までの旅行記の変遷を追い、外界の表象ではなく自己の主観性の表現として、旅行記がどのような形で 20 世紀に蘇生しえたかを跡づける。

(8)旅行記は、現代フランス文学においてどのように命脈を保っているだろうか。数だけを問題にすれば、「……紀行」「……への旅」の類のタイトルを冠する本は今なお多数刊行されている。反面、ロマン主義の「東方紀行」の時代は言うに及ばず、20 世紀前半に較べても、飛行機や自動車の普及で遠距離の移動が容易になり、また情報システムの飛躍的な発展により、世界中で未知の土地、未知の文明は見つけにくくなっている。旅を書くことの今日的意味を現代作家の声にも耳を傾けながら考える。

４．研究成果

大別して次の三点に要約される。(1)と(3)は当初の展望の修正を迫るような側面の認識であり、(2)は本研究を通じていっそう認識が深まった点である。

(1)ベルニエ『ムガル帝国誌』〔1670－71 年刊〕について、最新の校訂版を実現したジュネーヴ大学のタングリ教授が、本研究の枠で開催された国際集会で指摘したように、すでに前近代において、地理的・文化的他者の他性を描く筆致に、読者（そして作者）の属するヨーロッパ世界への忌憚ない批判が込められている。自文化中心主義への疑義、文化相対主義への志向がすでに見え始めている。

(2)近代旅行記の内実はきわめて多様であるが、第二次大戦までは総じて「他者」の発見を書くよりも異文化の鏡に映った自己を書く傾向が強く、旅行記が文学に昇華される契機もそこにある。一方、第二次大戦後の旅行記にはポストコロニアル文学、クレオール文学の趨勢と相まって、旧宗主国に属する自己を外部から見る視線が遥かに顕著になり、旅はオリエンタリズムの乗り越え、西欧人の新たな根拠の探索の意味を担いはじめることが何人かの重要な作家について確認された。

(3)交通通信手段が飛躍的に発達し、いかなる移動もせずに世界中の景観が提示される世の中になっても、現代作家たちは旅と創作との肯定的な相互作用を疑ってやまない。ル・クレジオやドミニック・ノゲーズを招き、本研究の枠で開催された公開講演や対話において、この点がより明確になった。

(4)以上の成果の一部は本研究の題目と同タイトルの冊子としてまとめられ、主要大学の図書館に配布された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 33 件）


(1)Yoshikazu NAKAJI , « *Voyage à Rodrigues* ou la double quête de Le Clézio »『旅行記と文学創造—フランス文学の場合』平成19年度～平成21年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、研究課題番号19320046、研究代表者、中地義和、p. 85-99. （査読有）

(2) 中地義和,「ランボー『地獄の季節』生成の一面—一八七二年の詩における教訓的な声」、田口紀子・吉川一義［編］『文学作品が生まれるとき』、京都大学学術出版会、2010、p.169-182. （査読有）

(3) 中地義和,「フィクションという探求—ル・クレジオとの対話」、『すばる』2010年8月号、p.174-190. （査読有）

(4) Yoshikazu NAKAJI, « Les “voix instructives” dans les poèmes de 1872 », *Europe*, « Rimbaud », no. 966, 2009, p. 130-138.（査読有）

(5) Yoshikazu NAKAJI, « Le "tombeau" dans *Les Fleurs du Mal* », *Baudelaire et les formes poétique* », *La Licorne*, no.83, 2008, p.25-40.（査読有）

(6) Yoshikazu NAKAJI, « Sur la "fatalité du bonheur" », *Parade sauvage*, 2008, numéro supécial « Hommage à S. Murphy », p.586-595.（査読有）

(7)Tetsuya SHIOKAWA, « Les études dix-septiémistes françaises au Japon : essai de mise en perspective », *XVII$^{e}$ siècle*, Juillet 2010, n$^{o}$. 248, p. 389-402. （査読有）

(8)Tetsuya SHIOKAWA, « La *pensée* selon Pascal », *Chroniques de Port-Royal*, no. 58, 2008, p. 399-414. （査読有）

(9) Tetsuya SHIOKAWA, « La campagne de la 18$^{e}$ Provinciale », *Chroniques de Port-Royal*, no. 58, 2008, p. 59-71. （査読有）

(10) Tetsuya SHIOKAWA, « Le temps et l’éternité selon Pascal », *XVIIe siècle*, no. 239, 60$^{e}$ année, no. 2, 2008, p. 273-283. （査読有）

(11) 塩川徹也,「パスカルにとって〈パンセ〉とは何であったか」『フランス哲学・思想研究』第 12 号、2007 年、p. 3-15. （査読有）

(12) Masanori TSUKAMOTO, « Qu’est-ce que le dehors ? – une lecture du “Retour de Hollande” de Paul Valéry, 『旅行記と文学創造—フランス文学の場合』平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書、研究課題番号 19320046、研究代表者、中地義和、p. 59-70. （査読有）

(13) 塚本昌則,「「無意識」と「錯綜体」——フランス作家たちの「抵抗」」、『フロイト全集』月報第 13 号、2009 年、p. 11-15.（査読無）

(14) 塚本昌則,「二十世紀フランス文学と死」、『死生学研究』、2009 年第 11 号、p.111-146. （査読無）

(15) Masanori TSUKAMOTO, « La modernité et la simulation chez Valéry — les puissances de l’inachèvement », *Paul Valéry : « Regards » sur*

*l'histoire*, 2008, no.1, p.327-334. （査読有）

(16) Masanori TSUKAMOTO, « *Les Paradis artificiels* et *Monsieur Teste* : la théâtralisation de la conscience », *La Licorne*, no.83, 2008, p.193-203. （査読有）

(17) Masanori TSUKAMOTO, « Le langage du rêve, le langage d'images », *Image, Imagination, Imaginaire autour de Paul Valéry*, 2007, p.213-223. （査読有）

(18) 塚本昌則,「紋切り型について──フロベール『ボヴァリー夫人』を中心に」、『文学と笑い』白百合女子大学 言語・文化研究センター編、弘学社、2007 年、p.117-134. （査読有）

(19) 塚本昌則,「『シュルレアリスム宣言』とテスト氏──ヴァレリーとブルトンをめぐって」、『水声通信』「思想史のなかのシュルレアリスム」、2007 年第 20 号、p.56-65. （査読有）

(20) Kan NOZAKI, « Le*Voyage en Orient* de Gérard de Nerval ou l'aspect "sentimental" du récit »『旅行記と文学創造—フランス文学の場合』平成19年度～平成21年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、研究課題番号19320046、研究代表者、中地義和、p. 27-37. （査読有）

(21) 野崎歓,「海外文学最前線・フランス語圏　新しい小説は、現実に働きかける」、『群像』2009 年、第 64 巻第 5 号、p. 331-340.（査読有）

(22) 野崎歓,「異邦の香り──ネルヴァル『東方紀行』論　第 4 章　女神の島」『群像』2009 年 3 月号、p.226-241. （査読有）

(23) 野崎歓,「異邦の香り──ネルヴァル『東方紀行』論　第 3 章　女の都」『群像』2009 年 2 月号、p.284-299. （査読有）

(24) 野崎歓,「異邦の香り──ネルヴァル『東方紀行』論　第 2 章　旅人が名前をなくすとき」『群像』2009 年 1 月号、p.166-179. （査読有）

(25) 野崎歓,「剥き出しの生　ウエルベック以降のフランス文学」、『ユリイカ』2008 年 3 月号、p.60-67. （査読有）

(26) 野崎歓,「吉田喜重の出発──『甘い夜の果て』まで」、『群像』2008 年 11 月号、p.275-282. （査読有）

(27) 野崎歓,「異邦の香り──ネルヴァル『東方紀行』論　第 1 章　遊歩への招待」『群像』2008 年 12 月号、p.82-96. （査読有）

(28) 野崎歓,「『レオ・ビュルカール』を読みながら」、『ネルヴァル手帖』2008 年第 5 号、p.85-90. （査読無）

(29) Marianne Simon-Oikawa, « Les arbres aux feuilles d'or », *Le Frisson esthétique*, n° 8, 2009, p. 52-55. （査読有）

(30) 畑浩一郎,「ゼトネビーとゼイナブ──女主人公の名前をめぐって」『ネルヴァル手帖』2008 年第 5 号、p.123-143. （査読無）

(31) 畑浩一郎,「自分を語る旅行者　シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』」、『仏語仏文学研究』、2010 年、第 39 号、p. 25-44. （査読有）

(32) 鈴木雅生,「ル・クレジオ『地上の見知らぬもの』について」、『研究ファイル』、第 37 号、共立女子大学、2009 年 12 月、p. 8-14. （査読有）

(33) Masao SUZUKI, « De la claustromanie au nomadisme : l'origine du goût de l'ailleurs chez Le Clézio », *Europe*, n° 957-958, janvier-février 2009, p. 69-81. （査読有）

〔学会発表〕（計 21 件）

(1) Yoshikazu NAKAJI, « Les lignes de force de "Nuit de l'enfer" », シンポジウム« Rimbaud. Des *Poésies* à la *Saison* », 2009年12月12日, フランス・パリ第4大学.

(2) Yoshikazu NAKAJI, « L'avenir de la culture française au Japon »,日本フランス語フランス文学会でのワークショップ、2009年5月24日、中央大学.

(3) 中地義和,　「ル・クレジオ、フランスからの出発」、東京外国語大学「多分野研究交流」2008年12月11日、東京外国語大学.

(4) 中地義和,「現代性とメランコリー──変容するパリのボードレール」、ブリヂストン美術館土曜講座、「パリと近代芸術家たち」第2回、2008年11月1日、ブリヂストン美術館.

(5) Yoshikazu NAKAJI, « *Voyage à Rodrigues* ou la double quête de Le Clézio »、コロック « Du récit du voyage à l'œuvre littéraire »「旅行記から文学作品へ」、2008年10月16日、東京大学文学部.

(6) Yoshikazu NAKAJI, « Voix des ancêtres, voix de soi : le "cycle mauricien" des romans de Le Clézio »、ピエール・ブリュネル教授退官記念シンポジウム「声」、2008年6月7日、フランス・パリ第4大学.

(7) Tetsuya SHIOKAWA, « La religion, le commerce et la politique internationale dans le *Journal d'un voyage fait aux Indes orientales* », ダルフージー大学（カナダ、ハリファックス）、パリ＝ソルボンヌ大学17・18世紀フランス文学研究センター共催国際シンポジウム、2009年9月.

(8) Tetsuya SHIOKAWA, « *Quod bellum firmavit, pax ficta non auferat* : de la campagne des *Provinciales* aux événements de mai 68 », パリ第 4 大学フランス文学科ジェラール・フェレロル教授セミナーでの講演、2007 年 4 月 6 日.

(9) Tetsuya SHIOKAWA, « La campagne de la

18e *Provinciale* », ポール・ロワヤル友の会及びパリ第4大学17－18世紀フランス語フランス文学研究センター共催研究集会「プロヴァンシアルのキャンペーン」、2007 年 9 月 19 日.

(10) Tetsuya SHIOKAWA, « La génétique des *opera interrupta*. Le cas de Pascal », 日仏シンポジウム「文学作品はいかにして生まれるか —— 草稿、文化的背景、テーマの変遷」京都大学文学部フランス文学研究室及び関西日仏学館共催、2007 年 12 月 7 日.

(11) 塚本昌則,「クレオールの幼年時代 —— パトリック・シャモワゾー『最期の身ぶり — カリブ海偽典』をめぐって」、日本フランス語フランス文学会2009年度秋季大会、ワークショップ「クレオール再考」、2009年11月8日、熊本大学.

(12) Masanori TSUKAMOTO, « Qu'est-ce que le dehors ? – une lecture du "retour de Hollande" de Valéry »、コロック « Du récit du voyage à l'œuvre littéraire »「旅行記から文学作品へ」、2008年10月16日、東京大学文学部.

(13) 塚本昌則,「フランス文学と〈私〉—— ポール・ヴァレリーをめぐって」、PESETO 人文学学術会議、2008 年 3 月 28 日、韓国・ソウル大学.

(14) Kan NOZAKI, « Retraduire Stendhal aujourd'hui : *Le Rouge et le Noir* dans le contexte japonais »、国際高等研究所研究プロジェクト「受容から創造へ」、2009年5月29日、京都・国際高等研究所.

(15) 野崎歓,「ネルヴァルとジュネ —— 『東方紀行』の現代性」、日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「ネルヴァルの現代性を探る」、2008年11月9日、岩手大学.

(16) Kan NOZAKI, « Le *Voyage en Orient* de Nerval ou l'aspect "sentimental" du récit »、コロック « Du récit du voyage à l'œuvre littéraire »「旅行記から文学作品へ」、2008年10月16日、東京大学文学部.

(17) 畑浩一郎, 「他者との邂逅 —— フランス・ロマン主義時代のオリエント旅行記をめぐって ——」、地中海学会定例研究会、東京大学本郷キャンパス、2008 年 12 月 13 日.

(18) Koichiro HATA , « Vingt ans de remaniements. Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse* », 国際シンポジウム« Balzac *et alii*, génétiques croisées, Histoires d'éditions »、2010 年 6 月 4 日、パリ第 8 大学

(19) 畑浩一郎, 「オリエントを旅するフランス人—— 1 9 世紀の旅行記から」、地中海学講座、「イスラームとヨーロッパの出会い」朝日カルチャーセンター、2010 年 9 月 11 日.

(20) 畑浩一郎, 「近東を旅するフランス人——19 世紀のオリエント旅行記から」、ブリヂストン美術館土曜講座、地中海学会秋期連続講演会「異文化交流の地中海」、ブリヂストン美術館、2010 年 9 月 25 日.

(21) 鈴木雅生,「ル・クレジオの変容と越境」（口頭発表）、日仏学生フォーラム、日仏会館、2009 年 10 月 10 日.

〔図書〕（計 17 件）

(1) Yoshikazu NAKAJI, *Rimbaud. Des* Poésies *à la* Saison（共著）, Classiques Garnier, 2009, p. 245-263

(2) Yoshikazu NAKAJI, *Rimbaud, l'invisible et l'inouï. Poésies, Une saison en enfer (1869-1873)*（共著）, Presses Universitaires de France, 2009, p. 120-140

(3) Yoshikazu NAKAJI, *Le Vers libre dans tous ses états. Histoire et poétique d'une forme (1886-1914)*（共著）, L'Harmattan, 2009, p. 33-45

(4) Yoshikazu NAKAJI, *Baudelaire et les formes poétiques*（編著）, Presses Universitaires de Rennes, 2008, 208 p.

(5) Yoshikazu NAKAJI, *La Voix. Hommage à Pierre Brunel*（共著）, PUPS, 2009, p. 283-294.

(6) Yoshikazu NAKAJI, *L'Autre de l'œuvre*（編著）, Presses Universitaires de Vincennes, 2007, 363 p.

(7) 塩川徹也,『哲学の歴史５』「デカルト革命」中央公論新社、〔V「アルノー」p.275-297；VII「パスカル」p.337-374〕

(8) 塩川徹也、『発見術としての学問』岩波書店、2010 年 7 月、190 p.

(9) 塚本昌則、『〈前衛〉とは何か？〈後衛〉とは何か？──文学史の虚構と近代性の時間』（共編）、平凡社、2010、592 p.

(10) 野崎歓,『こどもたちは知っている　永遠の少年少女のための文学案内』、春秋社、2009、195 p.

(11) 野崎歓,『文学・芸術は何のためにあるのか？』、東信堂、2009、p. 5-14.

(12) 野崎歓,『異邦の香り —— ネルヴァル『東方紀行』論』、講談社、2010、437 p.

(13) マリアンヌ・シモン＝及川,『日本の文字文化を探る一日仏の視点から』、勉誠出版、2010年、p. 329-352.

(14) Marianne SIMON-OIKAWA, *Traversée, Hommage à Montserrat Prudon*, Calliopées, 2009, p. 221-230.

(15) Koichiro HATA, *Voyageurs romantiques en Orient – étude sur la perception de l'autre*, L'Harmattan, 2008, 410 p.

(16) 鈴木雅生、ル・クレジオ『地上の見知らぬ少年』、河出書房新社、2010年、p. 349-356.

(17) Masao SUZUKI, *J.-M. Le Clézio : Évolution*

*spirituelle et littérature*, L'Harmattan, 2007, 290 p.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/

６．研究組織
(1)研究代表者
中地　義和（NAKAJI YOSHIKAZU）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50188942

(2)研究分担者
塩川　徹也（SHIOKAWA TETSUYA）
東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授
研究者番号：00109050
月村　辰雄（TUKIMURA TATSUO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50143342
塚本　昌則（MASANORI TSUKAMOTO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：90242081
野崎　歓（NOZAKI KAN）
研究者番号：60218310
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
マリアンヌ・シモン＝及川（MARIANNE SIMON-OIKAWA）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：70447457
畑　浩一郎（HATA KOICHIRO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：20514574
鈴木　雅生（SUZUKI MASAO）
共立女子大学・文芸学部・専任講師
研究者番号：30431878

(3)連携研究者
なし